報告：視覚障害者との美術鑑賞事業
──「触って話して見て楽しむ美術鑑賞ワークショップ」の実践

橋　本　恵　里

はじめに

国内の美術館や博物館ではほとんどの場合、鑑賞の際「展示品には触れてはいけない」、「大きな声での会話は控える」といったマナーを利用者にお願いしている。それは、作品保存の観点のため、また他の利用者の鑑賞の妨げにならないよう静寂な環境を保つためという理由による。しかし、視覚障害者を含め様々な利用者のニーズにできるだけ応え、また晴眼者でもより充実した鑑賞体験の獲得を模索するため、「視覚」以外の身体感覚を用いる鑑賞やグループディスカッションを取り入れた鑑賞ワークショップを実施する動きが近年高まっている。利用者の来館を促し、満足度の高い鑑賞の機会を提供する開かれた場として、このような事業が各地で取り入れられつつある。これらの視覚のみに依存するのではない、触覚や会話という要素を含む新たな鑑賞方法を通じることで、作品への理解が一層高まることが期待できると考えられる。視覚障害者は、介助者がいる場合、その介助者に作品の表現を言葉で説明してもらう鑑賞方法が通常主なものであろう。それが例えば触覚を駆使して展示作品に触れられるようになれば、鑑賞を自ら能動的に味わうことができる。また、晴眼者の場合でも、作品に直に触れるということは能動的な体験であり、視覚のみでは見落としていた部分に気付く可能性がある。展示品を全部見ることが目的となり、足早に作品を見た気になりがちな状況下では目に入らなかった部分を、作品一点一点時間をかけて丁寧に鑑賞することで、新たな魅力の発見に繋がると期待できるだろう。

当館で例年１回行っている視覚障害者との美術鑑賞ワークショップでは、近年、主に触覚と会話に焦点を当てて実施している。触覚を用いる側面としては、彫刻など作品そのものや、触図など作品を題材にした鑑賞教材、作家が作品制作過程で用いる道具類に直接触れるという触察による鑑賞法を取り入れている。そうすることで、作品の表現を味わい、制作過程について理解を深めることを目的としている。会話については、学芸員から作家がどのような人物であったかに関する紹介を行うことで、作品に対する参加者の興味関心を促し、また、鑑賞中およびワークショップの最後に参加者同士で感想を出し合うことを通じて、自分では気付けなかった新たな視点や発見が得られることをねらいとしている。

ここからは、令和２年度喜多方市美術館での移動美術館展の際に実施した本事業「触って話して見て楽しむ美術鑑賞ワークショップ」の報告を中心とし、成果と課題を検討する。
報告の順は以下の通りである。

１．実施概要と具体的な鑑賞プログラムの紹介
２．触察中の参加者の反応
３．参加者による本事業の感想
４．本事業の成果と今後の課題

※本事業は、NPO法人 福島県立美術館協力会の協力を得て実施したものである。

１．実施概要と具体的な鑑賞プログラムの紹介

令和２年度については、当館が施設の改修工事により休館期間であったため、喜多方市美術館で開催された移動美術館展の関連事業として以下の通り実施した（図１）。

［企画名］福島県立美術館移動美術館　世界の名作展関連事業「触って話して見て楽しむ美術鑑賞ワークショップ」

［日　時］令和２年11月３日（火・祝）午前の部10：30～12：00　午後の部14：00～15：30

図１：移動美術館展外観（喜多方市美術館）

［場　所］喜多方蔵の里、喜多方市美術館展示室
※喜多方蔵の里は、蔵の郷土資料を展示する施設で、喜多方市美術館と隣接している。
［講　師］伊藤匡、橋本恵里（福島県立美術館本移動美術館展担当学芸員）
［参加者］午前の部12名（視覚障害者７名、介助者５名）、午後の部３名（視覚障害者２名、介助者１名）
［概　要］オーギュスト・ロダンの彫刻２点、ヘンリー・ムーアの彫刻１点を視覚障害者、晴眼者がともに鑑賞する。ワークショップのねらいとしては、「作家についてよく知る・素材を知る･触る･話す」といった複数の鑑賞アプローチを通じて作品への理解を深めること、他の参加者と感想を共有して感じ方の多様性に気付くというような、美術館で可能となる鑑賞の醍醐味を味わうことの２点とした。また、少ない作品点数で丁寧に見ていくことで鑑賞行為そのものの面白さと、作品一点から得られる豊かな情報を感じ取ることも目標として据えた。

図２：オーギュスト・ロダン《「影」の頭部》
制作年不詳（1995年鋳造）福島県立美術館蔵

図３：オーギュスト・ロダン《柱上のフナイユ夫人の胸像》
（部分）1898-1900年（1996年鋳造）福島県立美術館蔵

なお、今回取り上げたロダンとムーアの作品情報は以下の通りである。
○オーギュスト・ロダン
⑴ 《「影」の頭部》制作年不詳（1995年鋳造），66.3×38×35㎝（図２）
⑵ 《柱上のフナイユ夫人の胸像》1898-1900年（1996年鋳造），162.5×51×36.5㎝（図３）
○ヘンリー・ムーア《母と子：腕》1980年，64×79.7×46.8㎝
以上３点、すべて福島県立美術館蔵

参加者を募集する際には、美術館ホームページや定期発行のニュースに告知を記載して行っているが、例年福島県点字図書館の高橋粛子氏のご厚意により、利用者への声かけのご協力を頂いている。ほぼ毎年参加されるような常連の視覚障害者も点字図書館の利用者が多い。

ワークショップ当日は、以下の流れの進行内容で実施した。

Ⅰ．はじめに（喜多方蔵の里　10分間）

※本ワークショップでは、触察中の参加者同士での感想交換を重要な要素のひとつとしていたため、参加者には２～３組で一つのグループとなってもらい進行した。

Ａ．まず今回の移動美術館展では、当館のフランス美術やアメリカ美術などの海外コレクションが主な展示内容であることについて紹介し、本ワークショップはその移動美術館展の関連事業である旨について説明を行った。次に本ワークショップは当館が継続的に取り

組んできた事業であることと本事業のねらいを説明した。

B．次に、スタッフおよび参加者全員が自己紹介を行う時間を設けた。そしてこれから以下で示していくが、ワークショップの流れについて簡単に説明を行った。

Ⅱ．講義と触察前の事前体験（喜多方蔵の里 20分間）

A．はじめにロダンとムーアについて、作家の人生と作品の特徴、ブロンズの制作方法について学芸員が解説を行った。(10分間)

B．その後、制作方法の解説で説明したブロンズの質感を体感するという時間を設けた。参加者にアートキューブを一人一つずつ渡し、各種の彫刻素材の違いを触って確認した。(５分間)

ここで活用したアートキューブだが、これは2005年に当館と郡山市立美術館によって開発された鑑賞用補助教材である。手に収まるサイズの12種の立方体に、作品の素材や造形要素、作品から得られる印象の想像を促すような各テーマがそれぞれ割り振られ、それらを触ることやツールの一つとして鑑賞者同士で会話することで、美術に対する興味関心の向上と、作品に親しむという鑑賞の一助となることが期待できる(図４)。どこの美術館でも気軽に使用できる汎用性や簡便性、美術に対する興味・関心を喚起する遊戯性があり、開発以来、主に子供達向けの鑑賞会などで活躍してきた。素材と制作工程の意外性に驚く気持ちなどが、奥ゆきのある作品鑑賞へと繋がっている。

本ワークショップでは、彫刻素材の違いを触って確認できる素材キューブを使用した（図５)。ガラス、鉄、陶など、彫刻や工芸で利用されることが多い素材で出来た小さな立方体が中に入っており、今回はその中から、ブロンズ、石膏、大理石、檜の４種をピックアップして使用した。参加者には、重さや冷たさ、質感について違いを感じられるかどうか問いかけを行った。この彫刻素材の触察を取り入れたのは、作品鑑賞前のウォーミングアップの意図もあるが、ブロンズの塊を実際に持って重さを感じるというアートキューブならではの触察体験ができる点にある。事前に素材の質感を理解し慣れておくことで、以降の触察では造形の把握と鑑賞により集中することができると思われる。

C．そして、展示室での鑑賞の流れについて具体的に事前説明を行った。(５分間)

参加者に伝えたポイントは主に以下の２点である。

• 最初に作品に触るのはなるべく一人ずつとし、大まかな全体像を一人一人感じ取った後に、作品の細部を全員で触って確認していくという流れとした。これは、視覚障害者が触覚を用いて対象を認識する際には、最初に物の輪郭を捉えて全体像を把握し、その後に細部の情報を獲得していくという順序のポイントを考慮してのことである。また、ロダンの２作品は同じ作家であっても、男性像と女性像とで表現が大きく異なるので、その違いも注目できる点であるということを先に伝えた。

• 第２点目は、介助者の参加の仕方について

図４：鑑賞用補助教材アートキューブ

図５：アートキューブを使用した彫刻素材の触察の様子

である。鑑賞中の当事者への接し方だが、当事者の手を引いて、いま触れているのがどの部位であるか最初から情報をどんどん与えていくのではなく、当事者が触った時にどう感じたかという感想を引き出すような形での接し方を意識してほしいと伝えた。普段の美術鑑賞の場では、介助者が「見える」情報を視覚障害者に言葉で描写して伝えるという方法が主であろう。本ワークショップではそうではなく、当事者が触った時の感想や疑問を最初の出発点として、それに受け応えるような形での会話と鑑賞への参加を介助者にはお願いした。また、介助者も当事者と同じ受講生の立場で、触れる鑑賞に一緒に是非参加してほしいというように促した。このように介助者も作品に触れることで、当事者と同じ触察体験を共有することになり、会話と議論がより活発になる可能性が期待できる。

Ⅲ．彫刻の触察（40分間）

喜多方市美術館展示室に移動後、１グループ一人ずつスタッフがついて一緒にまわり、１作品10分程度を目安に順繰りに鑑賞を行った。スタッフは鑑賞中寄せられた質問への回答と全体のフォローアップの役目を担当した。

Ⅳ．終わりに（20分間）

喜多方蔵の里に移動後、介助者も含めて一人ずつ、ワークショップ参加の感想を自由に発表し合う時間をとった。全員終えたところで本ワークショップ終了とした。

２．触察中の参加者の反応

以上が当日の鑑賞プログラムであったが、次に触察中の参加者の反応を紹介する。はじめに、アートキューブで彫刻素材を触察中の感想、次に、展示室で作品鑑賞中に聞かれた感想の一部を以下に挙げていく。

① 作品鑑賞前に行った彫刻素材（ブロンズ、石膏、大理石、檜）の触察中の感想

- 重さがそれぞれ全然違う。石膏や檜は軽くて、ブロンズがとても重い。
- 冷たさが違う。大理石は冷たくて、キッチンの天板等で使われている例を思い出した。
- ブロンズは少しざらっとしていて、大理石はツルツルしている。

このように、重さと各素材の温度の違い、そして特にブロンズの重みに注目する声が多く聞かれ、質感の違いについて指摘する感想もあった。作品を実際に触る前に、作品を構成する素材本来の重量感を体感できるというのは、以降の触察で頭の中にイメージを思い描く際、作品の重量感にも結びつくものがあるだろうと期待できる。ブロンズ作品がずっしりと重みのあるものという認識は、この素材キューブを触ることでよく実感できると考えられる。

② 触察による作品鑑賞中の感想

⑴ オーギュスト・ロダン《「影」の頭部》

- 頭の突起部分が最初分かりづらかった。
- 顔自体大きいが、顔のパーツもはっきりしている。
- 楽しい感情を表してはいないことが分かる。

［疑問］

- 目を閉じているのか、または開けているのか。
- どうして首をここまで曲げているのか。何を表現しようとしているのか。

⑵ オーギュスト・ロダン《柱上のフナイユ夫人の胸像》

- 髪をまとめて結い上げているのが分かる。
- 顔が小さくてツルツルしている。
- 後ろの背中側を触って、布を斜めにかけているような衣服なのだろうと思った。
- 斜め下に首をかしげていて薄目で視線を落としているように思う。
- モデルの女性が作家のパトロンの妻だと聞いて、美しく表現されていることに納得した。
- 優雅な感じが伝わってくる。

⑶ ヘンリー・ムーア《母と子：腕》

- 母親の頭がこんなに薄く表現されているのが不思議でもあり面白くも思った。鳥のような頭の形に感じた。
- 子供は頭が球体で表情がないが、母親は目が表されている違いがある。
- 開いた両足の間にたわむスカートの表現がなるほどと思った。
- 母親は指も表現されている。細かく表現されている部分とそうでない部分がある。

- 母親と子供との間に流れている愛情、子供に対する母親の慈愛が感じられる。

［疑問］

- 子供は大体何歳ぐらいなのだろう。たぶんまだ小さい年だろう。
- どうして母親の頭の形をこのように表現したのだろうか。

ロダンについては、顔・髪・衣服など各造形要素が一体となっている表現上の特徴がある。参加者の様子では、２作品とも髪型を把握する際、時間をかけて形をイメージしようと努める姿が多く見られた（図６、７）。頭部のボリューム感を強調する作家の表現上の特徴によるものだろう。また、瞳の開閉の状態や、《柱上のフナイユ夫人の胸像》では衣服の具体的な形状や着方など、視覚だけでの鑑賞ではあまり気に留めないであろう箇所にも関心が注がれたが、これは触察を用いる鑑賞ならではのことと思われる。作品が表すイメージについても意見が出され、《「影」の頭部》については、首を曲げるポーズや表情がどういうイメージを表そうとして意図されたものなのかという点を指摘する声が多く聞かれた。この男性像は《地獄の門》という巨大な作品を構成する裸体像の一部の習作であり人間の「苦悩」を表現していると、スタッフから補足説明があった際には、参加者から納得するような反応が得られ、再度それを確かめるように触察を楽しむ様子が見受けられた。《柱上のフナイユ夫人の胸像》についても、造形表現から優美な女性像という印象を感じ取ることができやすかったようである。モデルはロダンのパトロンの妻であることを説明によって知った際には、作家が美しい表現で仕上げたことに対して納得する反応が多く見られた。

図６：ロダンの作品を触察中の様子

ムーアの《母と子：腕》は、ロダンの具象的な表現とは異なり、人体造形は細部が省略され半抽象的な形となっている。そのため、作品イメージを想像するのが困難ではないかという懸念がスタッフ側にはあったが、触察を開始してみると参加者は形体をスムーズに把握していたようであった（図８）。造形表現に対する気づきとしては、抽象化された人体であっても母親は指や目が彫られていて具象的な部分もあること、母親には目があるのに対して子供は表情の要素が省略されていること、母子の頭部の形状が球体と薄い形とで異なっていることなど、抽象と具象、形状の差異など二項の「違い」についての感想が多くあがった。そして、作品から得られたイメージとしては、母子間の愛情、子供を慈しむ母親の温かな眼差しが感じられるとの声が聞かれた。この点は、視覚のみでの鑑賞以上に触察を用いてこそ実感を深められるイメージであると考えられる。「目で見る」だけでの鑑賞では、客観的に対象を眺めることにより鑑賞者と作品との間に一定の距離が生じるが、触察を通じることでその対象と直接的な繋がりを持つことができる。本作について言えば、母子間の交流の中に自分も第三者として能動的に関わることが触察によって可能となる。子を向かい合って母親が抱き上げる像をイメージしていく中で、自分が思い描く親子間の愛情というものをより具体的に投影しやすくなるのであろう。また、印象的だったのが、鑑賞中参加者が母親の像を「お母さん」、子供のほうを「お子さん、子供さん」というように敬称で言い表していたことである。このことも、作品に直接触れることで、親子像をより身近に感じ取ったためにみられた側面ではないかと考える。

３．参加者による本事業の感想

作品鑑賞を終えた最後には、参加者に本ワークショップの感想を自由に述べてもらう時間を設けた。そこで出された感想の一部を要約して以下に記載する。

［視覚障害者からの感想］

- （弱視の参加者）ブロンズは最初冷たそうな印象があったが、触ってみると丸みがあって温かみを感じた。
- ロダンの男性像は、作家の内面を見せられたような感じがした。
- ムーアの作品は、無理がなくゆったりとしているように思えた。子供を見て、お母さん自身が楽しんでいる感じがした。
- ムーアの像を触って、私も昔こういうように子供を抱いたなと思い出した。全体的に柔らかい感じがした。親子の繋がりを感じられた。

［介助者からの感想］

- 美術館に対する要望として、音声ガイド設置をさらに充実して頂けると有り難い。普段は、私達介助者が当事者の方の「目」になって、作品から分かることを説明しているが、それがどういう意味で表されているのかなど内容についてはよく分からなく、自分の考えが合っているのか自信が持てない。そういう点について音声ガイドで知識を補えたら助かるといつも思っている。
- 写実的でない作品でも、自分の感性で想像して楽しめることが分かった。触れて見て感想を聞いて、触れることの大切さを感じた。
- 触って話している様子を見ていると、同じ物を触っていても、頭の中で思い描いているのはそれぞれの感性で想像したものなんだろうなと感じた。

以上のように、造形だけでなく作品が表すイメージ内容にも思いを馳せられたことに言及する感想が多く寄せられた。介助者の感想にもあるとおり、それはそれぞれの感性で思い描いた像であり、触るということを通じて、鑑賞者にとってより親しみを感じられるオリジナルな作品イメージが心の中に浮かび上がるのだといえる。

４．本事業の成果と今後の課題

上記に記載した参加者の感想やプログラム進行中の反応を総合的にみて、事業実施のねらい通り、触察および会話というプロセスを経ることで作品の理解を深めるという様子が確認できた。

美術館に寄せられた要望としては、上述で紹介したとおり、ある介助者からは音声ガイド設置の普及を望む声があがった。当館では、音声ガイドは大型の企画展で設置することはあるが、大半の展覧会や常設展について現状では音声ガイドの設置は行っていない。展示替えが定期的に生じるという都合や、対応できる体制作りの検討など、すぐに常時設置するのは中々容易いことではないのが現実だが、実現の難易度を考えるより前に、まずはそのようなニーズがあるという事実を知ることが美術館側には求められているだろう。

また、活動の最中に弱視の参加者からは、普段の鑑賞を行うコツとして、キャプションの情報を見る際にスマートフォンやタブレットの拡大鏡ツールを使っているとの話を教えて頂いた。当館も含めて、展示室内で携帯端末の使用は不可としている館が多いだろうが、このよう

図７：ロダンの作品を触察中の様子

図８：ムーアの作品を触察中の様子

な使用事例があることを認識し、目が見えにくい利用者にも便利な形で情報を取り入れやすいキャプションのあり方を考えることは意義があるだろう。幅広い利用者が、美術館にどういう設備やサービスを求めているかについて、ニーズの聞き取りを積極的に行っていくというのは公共施設として重要な役割の一つである。

今年度は鑑賞の対象として、西洋のブロンズ彫刻を取り上げて触察を行ったが、過去の開催では、版画家齋藤清の代表作《会津の冬》シリーズについて触図を用いて鑑賞を試みたり、彫刻家佐藤玄々の木彫作品を触察によって鑑賞したりというように、平面作品・立体作品のジャンルにこだわらずその都度、鑑賞の方法に工夫を凝らして実施してきた。今後も触覚と会話をキーワードにした鑑賞方法を実践していくとともに、例えば嗅覚や聴覚などほかの身体感覚の要素もアプローチに取り入れることで、新たな作品イメージの展開の可能性にも期待できるのではと考えている。

本事業を実施するごとに、視覚障害者の感想から、晴眼者である私たち美術館スタッフが新たに気付ける学びは数多くある。「見える」私たちは、視覚情報にとらわれてしまって作者が表しているイメージの奥深さにまでじっくり眼を向けられているだろうか、時間をかけて鑑賞を行うことで作品１点からいかに豊穣なイメージが得られうるかなど、本事業は鑑賞行為の本質を再考する機会ともなっている。「見える・見えない」の垣根を越えて、密度の濃い鑑賞体験と美術鑑賞の面白さを利用者に伝えるとともに、ワークショップから得られた参加者の声を聞いて今後の鑑賞方法に活かしていく、このように美術館側と参加者の双方によって発展が期待できる本事業は、今後も継続して行っていく意義があるといえるだろう。

（はしもと　えり／学芸員）

＊当館でのこれまでの本事業の実施について、NPO法人 福島県立美術館協力会各位、半田こづえ氏、真下弥生氏、髙橋粛子氏には多大なるご協力を頂きました。また、本事業に携わって頂きました喜多方市美術館はじめ関係各位に記して謝意を表します。

論文要旨

報告：視覚障害者との美術鑑賞事業―「触って話して見て楽しむ美術鑑賞ワークショップ」の実践

橋本　恵里（学芸員）

美術館での鑑賞というと、視覚に依拠して「作品を見る」ことが一般的であるが、近年ではそれだけではない新たな鑑賞方法を模索・提示する美術館が増えている。それは、障害の有無に関わらず全員が鑑賞を楽しめる場の実現を目指して、設備やサービスの充実を図る動きと同様に進められてきている取り組みの一つであるといえる。福島県立美術館では、2012年から毎年１回、視覚障害者と当館所蔵品を鑑賞するという事業を継続して行ってきた。本稿は本年度行った本事業の報告を通して、美術館における鑑賞方法の可能性について再考するものである。

Report : Art appreciation for the visually impaired; A “Touch, Talk, See” Workshop

Hashimoto Eri (Curator, Fukushima Prefectural Museum of Art)

In the museum context, when it comes to art appreciation, we commonly rely on our vision to “see the work.” But in recent years, more and more museums have begun exploring new, alternative methods of appreciating art and offering them to visitors. This can be viewed as part and parcel of the movement to enhance museum facilities and services so as to realize a space where everyone can enjoy art regardless of any physical disability. Since 2012, the Fukushima Prefectural Museum of Art has been conducting a program once a year that brings visitors with visual impairment into the museum to interact with items in its collections. Through a report on how the project was conducted this year, this paper reconsiders the possibilities of art appreciation methods in museums.